東京旭川会
会報
ななかまど

第11号　平成4年(1992)10月1日
発行　東京旭川会　〒160
東京都新宿区西新宿7-4-3升本ビル
東京美装興業株式会社内
TEL.(03)3363―2721
編集　東京旭川会広報委員会

特集・郷里へのアッピール

〝二十四の瞳〟の熱き想い

東京にいると、「旭川」は遠くに聞こえる。サッポロ、ハコダテはいかにも北海道を連想させて有名なのに、どうしたわけか。思いきって「大雪市」とでも名前を変えたら――そんな激しい提案もとび出す〝ふるさと好き〟〝ふるさと心配症〟の二十四人が知恵を出して提案する旭川への熱きエール――。

五つの提案

①旭川空港を拡充し、ダブル・トラッキング（二社乗り入れ）を計り、料金引下げをおし進める。貨物便もふやし、人、物の交流を。東京でメキシコのカボチャかチリのブドウが安く売っている。むろん空輸ものだ。

②旭川の観光客は夏場の六ヵ月のみ。やはり二次産業（製造業）がいい。むろん、市の工場請負政策が必要。

③旭川駅の南側（河川敷）の活用。忠別川は水量が減っているので上流で美瑛川に水路を切替え、駅裏と神楽地区を地続きにし、土地活用を計る。旭川駅は高架駅とし南北の交通を妨げないようにする。

④鷹栖センターの活用。悍川から鷹栖まで有料自動車道路があるが、統計では鷹栖から入った車より出た車の方が断然多い。これは鷹栖から入るより悍川から入った方が便利だということになる。鷹栖から市内への道路を整備すること。

⑤融雪道路の新設。雪隔時の深くえぐられた車輪の跡から右左への転換は不可能に近い。そこで市内の主要道路に温湯を流して路上はいつもアスファルトが出ているようにしたい。

（大久保藤次郎）

ドリームランド全景

人（ひと）

人気の創作人形師 原康子さん

旭川も歴史を重ねると様々な人物を輩出する。今回の「人」は、幹事の伊藤英子さん推薦の創作人形師として独自の境地を開いて人気絶頂の原康子さん。伊藤さんとともに渋谷のお宅に参上する。東京生まれの原さんが結婚して旭川へいったのが昭和三十二年で、四十五年まで北の都で生活した。でも、この時代は布地のごくありふれた人形しかつくらなかった。

「いつでしたか、旭川信用金庫に出かけた時、置いてあったグラフ雑誌を見ていて〝いちが人形〟という紙人形のすばらしさに魅せられました。やがて東京に戻ると、正に独学で紙人形の創作に没頭したのです」

原さん自身の回想である。和紙は和紙でも京都の黒谷和紙に目をつけた。暖かみのある、ヒナびていて、それでいてヤボに流れない、正に伝統の和紙に原さんはぞっこん惚れ込んでしまった。重文に指定されているというから知る人ぞ知る和紙であったのだろう。人肌の匂う和紙を一枚、一枚はり重ねるのは辛抱のいる手仕事。一体の人形の完成に半月はかかる。

しかも原さんの作品は情念をテーマにしており藤娘など世俗な品位とか美しさを通り越し胸がはだけたり、裾が乱れたり奔放な女態が息づいていて女心のすさまじさに、男心が身ぶるいする。都心の一流デパートで個展を開くが、作品はあっという間に売り切れる。一体二十数万円から三十余万円というお値段だが、手堅いファンがついている。

（写真は制作中の原さん）

アサヒガワにこうしてほしいア・ラ・カルト

アイデアの街に

故郷は遠くにありて思うもの。私は旭川を離れて四十余年になる。ふと、思いついたのは旭川は全国に魅けたアイデアを生み出す町ではないかということである。日本ではじめての歩行者天国（買物公園）を実施し、平和通りに鶏が帰って来て巣を作ったと聞いた時は感激だった。そうしたアイデアと心を環境とか、福祉と高齢化社会の問題に、また、文化活動の面に生かしてほしい。旭川市の知名度はある程度高めたい。イベントの町として、日本の最北でやれる最高のものを持って来たい。文化的な面で古典芸能を演じられるホールを作る。

北方領土の問題も動き出し、日本が北へ広がろうとしている時（ただ単に物理的にだけでなく）政治的にも経済的にも一つの拠点となるための自覚を高めることも必要でないかと思う。

しかし、結局は、旭川の人たちが健康で、幸福に安心して住める町であることが大切であり、旭川市民の望むことが実現できればよいと思う。遠く離れて住む私だが、高齢の母がいる旭川だから、遠くからでも安心して見ていられる町であってほしいとの本音も出る。（須藤智恵子）

旭川空港の早期拡大

①空港拡大により、ダブルトラッキングによる輸送力のアップとサービスの向上、将来は千歳空港の国際空港（日本の北の玄関）化、貨物ターミナル港としての需要の増大による国内路線との競合等の関連で、旭川空港が千歳空港に代る道内路線のメーン空港を目指す。

②対サハリン路線のサブ国際空港の実現を目指す。（八木祐四郎）

受入れ施設を

①東京で活躍する旭川人が故郷へいった時の受入れ施設が欲しい。

②文化施設の充実、名実ともに札幌につぐ文化都市に――。（海老沢美智子）

無農薬野菜を

①大学、工場を誘致する。

②ジャガイモ、豆を使った名産品を売り出す。

③無農薬野菜を栽培して売り出す。

④スキー場の新設。

⑤修学旅行生徒用宿泊施設の完備。（中[illegible]久子）

北の国際空港を

所要で年三、四回、旭川に行くが、いつも痛感するのは、空の足だ。いまや立地条件からみて大きな国際空港をつくるのは日本で旭川地区しか残されていないのではあるまいが、北へ向ってサハリン、シベリアとの航空路はむろんのこと、カナダ、アメリカへの北のゲートが旭川だろう。まず、空の足を固めないと、国内の企業誘致もままならないのであるまいか。

それには大がかりなプロジェクトを考え、大いにPRして欲しい。東京から眺めていて地元からのPRはゼロとしか映らない。もっと積極的に願いたい。（松原利治）

サハリンとの交流を

①北方経済圏の確立。

②自然環境を生かした夏期長期滞在用保養地の建設。

③農産物をサハリンや千島に送るなど交流に務める。

④旭川空港の整備拡張、ジャンボ機の発着を可能にすることなど。（加藤辰雄）

北海道の二分県案

北海道を南、北に二分する。北は旭川、南は札幌にそれぞれ行政官庁を置く。これは札幌のマンモス化に歯止めをかけると共に、道北、道東地域の活性化を図ることになる。

国際的、全国的各種イベントの開催を。四季を通し文化、体育、芸能、科学、医学、等々あらゆる分野の国際的、全国的大会、研修会などの開催により旭川の良さをPRする。また、「二十世紀の森など旭川の自然を活用してイベントを誘致する。例えば全国ボーイスカウト、本州の府県市町村と共催での夏休みの青少年キャンプ、スキーなど。（桑本平八）

自然を生かした町

市の美化とか発展とかとなると、どうしても東京などの大都会の真似になりがちです。旭川は〝川の町〟なのでこの河川敷とか川の流れを中心に自然を生かした町作りをして欲しい。コンクリートやアスファルトの化けもの都市はいただけません。自然[illegible]生かした旭川ならではの独創的な町を――。（伊藤英子）

積極的PRを

いつも思うことは、旭川の地名が意外に関東方面に知られていないことです。近隣の富良野が国際スキー場などで有名になっているのに、旭川としての顔は何一つ宣伝されていないのか。これから五十万都市を目標に進んで行くためには、思いきったPRが必要ではないかと思います。

まず、旭川の顔がはっきり見えるようにすることが、第一と思います。それには、市として旭川出身の有名人を大いにPRするとか、特定産業の立地条件の有利性を宣伝するとかが必要と思います。

折角東京に市の連絡所があるのですから、市の催しのときはご招待するとか、広報活動によりいっそう積極的にとりくみ、観光の発展に努力していただきたいと思います。（田村昌士）

旭川会の躍進を

旭川市も気になるが、東京旭川会の躍進も大事ではあるまいか。（竹原茂雄）

好きだからこそ、なんでも言ってしまおう

東京旭川会

知名度をもっと

「旭川ってどこにありますか」と尋ねられるのが一番つらい。北に都のあることを知らせたいと思います。（大城栄子）

若ものの声を

旭川の若ものの意見を集めて、自分たちの故郷のありようを聞いて欲しい。（武田陽子）

航空券の入手難

観光客の誘致策を行政の努力で何とかならないものか。飛行機の切符をもっととりやすくするなどキメ細かいサービスが欲しい。（高野哲男）

町自体の活性化

ひところは旭川市の目玉のようにいわれた旧師団通りの買いもの公園、近頃はさっぱりだという。郊外にスーパーが続々と開店して駐車出来ない買いもの公園は時の流れにとり残されたのではあるまいか。この中心街をどうしたらいいのかまず考えていただきたい。（吉田敏明）

ロダンを泣かすな

旭川の文化的目玉は彫刻だそうである。いつかニューヨークで国際的彫刻家、新妻実さんにお目にかかったおり「彫刻は作品そのものがよくなければならないが、それをどういう環境に飾るかが問題なのです。私が作品の製作を依頼されたおり、必ずどこに飾るか、出来たらその場所を確かめにいきます」とおっしゃっていた。いってみればロダンはロダンの場があって然るべきであり、どこに置いてもいいというわけのものではないということだ。つまり彫刻という作品が先行するのではなく環境とか景観が先行することを新妻先生は指摘されているのである。そういわれて思うに、ロダンがいいからといってロダンの作品ばかりを林立させたら、これは鹿児島の西郷隆盛の墓地のように鬼気迫る墓石の乱立となってしまう。

さらにシカゴでピカソの奇怪なる彫刻を見た。摩天楼の林立するど真ん中、緑など全くない一角がぽっかり口をあけたようにプラザ（広場）になっていて、ピカソの芸術はそこの隅に飾られていた。摩天楼を巧みに活かしたピカソの存在は〝実存〟というイメージだった。

わがふるさと旭川よ。ロダンやピカソが泣くようなことがないだろうね。（伊藤一男）

目玉不足の旭川

人を集めるための目玉がない。ユーカラ織や木工細工などでは無理です。（土屋初代）

空路は高すぎます

ことし（平成四年）所用あって二度、旭川を訪れました。二度目は旭川空港が雪のため千歳空港に着きました。航空券の払い戻しが片道で八千二百円です。要するに東京、旭川間がきわめて割高です。札幌、旭川間が八千二百円とは――。ひどい地域格差は差別につながりませんか。（橋本裕子）

四季の観光を

①トレードマークになる様な有名企業の工場を誘致する。

②オール・シーズン向けの観光を。昔のままの熊まつりは、動物愛護の点から問題はあろうが、現代に通用する〝クマ・フェスティバル〟は考えられないだろうか。昔のウタリ村も再現してはどうだろう。（本間敏幸）

文教・観光の充実

企業誘致も原材料と製品の消費地への物流を考えると大きな期待は出来ない。農林業の一次加工と北北海道の商業中心地としての発展しか望めない。従ってこの自然を生かした文教、観光面の充実を図るべきである。（南　栄二）

より以上の発展を

旭川市広報誌をおりにふれ拝読いたしていますが、現在の旭川市の発展ぶりは誠に驚くばかりです。北海道、東北を含めて人口第三位の大都市であり、今後計画中の都市施設、各種産業、多様な観光開発のめざましい発展ぶりを見て只々感激の至りです。しかも今後とも新たな地区計画制度の具体的実現により、魅力ある街並み造りが進められるなど着々と飛躍的な発展を期しておられる由、市当局を中心に全市一体となって全力投球をなさっておられるので、私ごとき不勉強な微力者で創造的能力もありません者が申し上げるような要望事項もとくにありません。御了承願います。今後とも東京旭川会の発展のため一層のご協力を。（縣　二郎）

雄大な清潔さこそ

私は雄大な清潔さを前面に立てた新しい観光をあえて提唱したい。先日も旭商九回生の集いが旭岳温泉で開かれたが、旭川から車で僅か四十分のところ、雄大な景観の中にあるこの温泉郷を改めて見直した。石狩川でも牛朱別川でも汚れてるのは残念でならない。（矢野正康）

ラベンダーとメロン

私など北海道の観光といえば富良野のラベンダーと夕張メロンを想います。ラベンダーのすばらしさ、ここは除虫菊畑をきりかえたものでアイディアの勝利でしょう。夕張メロンも炭鉱の閉山をきっかけに考えついたアイディアです。（牧田逸子）

旭川東京線にもう一社

東京、旭川間一航空会社でなく、もう一社参入して欲しい。いざ乗ろうとしても席がないので困ってしまう。二社になると多少ともサービスも向上するのではと思います。（高橋文子）

15年目を迎えた総会・懇親会

百五十五人の参加で

ミス旭川から八木会長(右)と矢野副会長に花束贈呈。

第十五回東京旭川会の総会・懇親会は平成三年十月三十一日午後六時から、東京・新宿の京王プラザ・ホテル扇の間で開催された。本間敏弘幹事の司会で、八木祐四郎会長が議長席について審議に入った。第一号議案、平成二年度事業報告並びに決算報告）では桑本平八事務局長から説明、植木宏昌監事から収支決算は適正に処理されている旨の会計監査報告があった。続いて第二号議案（平成三年度事業計画並びに予算案）についても事務局長より説明があり、両議案とも原案どおり承認された。次に第三号議案の役員改選については八木会長の留任と決まった。

総会につづいて懇親会に移った。加藤桂子幹事が司会、八木会長が挨拶、旭川市から会長および矢野正康副会長にミス旭川の尾形千美、三浦明子両嬢の手で花束が贈呈された。このあと板東市長の挨拶があり、橋本裕子幹事から同市長に花束が贈呈された。つづいて来賓、国会議員の紹介があり、五十嵐広三、佐々木秀典両代議士よりそれぞれご挨拶をいただいた。

乾盃の音頭は旭川商工会議所小桧山享会頭が「おめでとうございます」と元気良く杯をあげた。会場には旭川市のポスターが掲げられ、また開会前から旭川市の美しい四季の風景がビデオで放映された。

会場の扇の間は隣接する新都庁の高層ビルの夜景も美しく、はなやかな雰囲気に包まれた。会場には各方面から寄贈を受けたビール、酒、ワイン、焼酎、ウィスキーなど飲みものも豊富に揃えられた。郷里から送られたカボチャや、ゴショイモ、トウキビなどの懐しい味も並べられた。

お待ち兼ねの抽選会は武田陽子幹事の軽妙な司会で、ミス旭川の両嬢が抽選箱から券を取りその番号を読みあげるたびにどよめきと爆笑がおこり、中にはお目当ての賞品に当たらずガックリするなど一喜一憂、今年は特に豪華賞品の数も多く大いに盛り上りを見せた。最後に金森耕造旭川観光協会長の万歳三唱で八時過ぎにお開き。

平成三年度事業計画

▽第十六回総会、懇親会は十月二十七日(火)、新宿の京王プラザホテル(前回と同じ会場)

▽郷土訪問の旅は本年度取止めます。なお平成五年秋には旭川市開基百周年を記念して建設されたクリスタルホールが完成し会員の皆様からの基金による、三浦白琇画伯の「北海」が飾られることになっていますので、同ホールのオープンに合せて訪問の旅を実施する予定。

抽選会では武田幹事が大ハリキリ。

郷土の味も並んで——。

第15回東京旭川会総会出席者

▽来賓＝旭川市長・坂東徹、旭川市市民館長・須見彝彦、商工部次長・古川勝吉、秘書課長補佐・斉藤昂一、庶務課・山崎成治、旭川市商工会議所会頭・小樽山享、副会頭・小山昌克、振興部長・武田雅男、旭川観光協会会長・金森耕造、ミス旭川・尾形千美、三浦明子、前旭川市議会議長・関根正次、旭川信用金庫理事長・松田忠男、道北地域旭川地場産業振興センター専務理事・松山輝雄、㈱北海道倶楽部事務局長・早川四郎、サッポロビール営業推進部担当部長・加藤一朗、日本エアシステム東京支店販売部長・大本裕昭、同マネージャー・佐伯泰、全日本空輸国内旅客本部長・畑収、東京夕張会事務局長・服部崇。

▽会員＝相内正博、伊藤英子、伊塚清、五十嵐広三、伊藤一男、今津寛、井川正、井上恵三、板井一瓏、磯美恵子、飯田昭宣、石川渉、氏家一衛、植木宏昌、上草義輝、梅原音二、海老沢美智子、榎本信義、大城栄子、折登建憲、大久保藤次郎、奥山三男、大野武夫、岡田直子、折登和憲、小川礼子、折登昭三、尾花利津、太田剛、尾崎靖亮、太田幸雄、小栗隆治、加藤桂子、金津良三、笠原貞夫、河村尚之、加藤辰雄、笠原ゆり子、河端敏博、金子登、金子キク、金崎二三子、川西勲、片岡保彦、桑本平八、黒崎弘、小林光政、小林正一、小柳武二、小沼敦、佐々木憲一、佐久間亜矢子、斉藤弘明、佐々木秀典、佐々木雄一、坂上博二、志倉美子、島田実、島田瑞子、島田嘉明、島田ミエ子、茂川トヨ、島礼弘、鈴木吉之、須藤智恵子、鈴木与之助、杉山俊朗、杉山恵子、杉本直之、関口和子、関晃、関谷宏年、武田陽子、高橋国二、竹原茂雄、田中幹夫、高橋文子、竹内薫、竹村政芳、高橋正夫、高野哲男、高木明、高根由紀子、谷由利子、土屋初代、土屋好史、坪田賢一、土井磨智子、中村敏江、長瀬汎、

懇親会では、会員の健康を祝して乾杯。

中島行雄、中陳国光、中里亮子、仲田孝、中川和子、西田育子、西舘利子、丹羽敏明、丹羽登志子、西原美佐江、野副田母子、花輪音三、花輪元治、坂東宗光、坂東幸子、橋本博治、橋本裕子、長谷川健一、芳賀照雄、畠山龍英、林輝一、平岡美恵子、広野貴之、広瀬敦子、平野雅甫、二川武、古川美保子、深澤幸子、福士君子、堀川和延、堀内貞子、本間敏弘、松原利治、松永茂、松村豊、牧田逸子、松原益子、前田知子、牧野哲雄、枡澤滋、増子正雄、松井圭子、南栄二、御手洗正夫、宮森信之、南むつ子、村上康範、向井地博明、向井地和子、村上登茂子、森陽一、森真弓、八木裕四郎、矢野正康、山際誠一、山口道弘、山本正純、山内和夫、山内幸子、安井規雄、吉田敏明、吉田友之、横峯昇、吉崎与一、中西カメラマン(毎日新聞社)計一五五氏

平成三年度役員改選

▽会長＝八木祐四郎（再任）▽副会長＝矢野正康、大城栄子、松原利治、牧田逸子（以上再任）▽幹事＝伊藤一男、伊藤英子、伊塚清、今井良三、折登建憲、大野武夫、大久保藤次郎、加藤桂子、加藤辰雄、桑本平八、須藤智恵子、竹原茂雄、竹村政芳、田村昌士、武田陽子、高橋文子、土屋初代、西田育子、橋本裕子、花輪元治、原公朗、堀川和延、本間敏弘、南栄二、向井地和子（以上再任）岩村久子、海老澤美智子、小柳武二、高野哲男（以上新任）▽監事＝黒崎弘、植木宏昌（以上再任）▽事務局長＝桑本平八（兼任・再任）▽顧問＝縣二郎、梅原音二、太田剛、柴山敏夫、土門勇、花輪音三、林輝一、二川武、村井與吉、吉田千里（以上留任）吉田敏明、御手洗正夫（以上新任）▽名誉顧問(旭川市関係)市長・坂東徹、市議会議長・賀集一正、商工会議所会頭・小檜山亨、旭川観光協会長・金森耕造、前市長・松本勇、前議会議長・関根正次（順不同）

五つの委員会も

前年度に引き続き、会の運営に総務・行事・旅行・広報・親睦の五委員会を設置することとなった。各委員会のメンバーは次の通り。

▽総務委員会＝委員長・堀川和延、副委員長・折登建憲、委員・黒崎弘、同・植木宏昌▽行事委員会＝委員長・南栄二、副委員長・大野武夫、委員・伊塚清、同・海老澤美智子、同・加藤桂子、同・高野哲男、同・土屋初代、同・向井地和子▽旅行委員会＝委員長・竹原茂雄、副委員長・花輪元治、委員・伊藤英子、同・武田陽子、同・原公朗、同・加藤辰雄▽広報委員会＝委員長・田村昌士、副委員長・伊藤一男、委員・大久保藤次郎、同・須藤智恵子、同・高橋文子、同・橋本裕子、同・岩村久子▽親睦委員会＝委員長・本間敏弘、副委員長・武田陽子、委員・小柳武二、同・須藤智恵子

ゴルフ同好会会員募集

以前各同好会の申込みを頂きましたが、諸事情から殆んど活動することなく誠に申し訳なく思います。このなかで、ゴルフが細々とコンペを実施して来ていますが、当時のメンバーの方々で転出された方も多くまた新しく入会された方々は洩れている現状でありますので、あらためてゴルフ同好会会員を募ることと致しました。本年度も春秋二回のコンペを計画していますので多数の会員の入会をお待ちします。

▽連絡先＝親睦委員会本間委員長　〒一八四・小金井市本町五―一九―一　本間不動産　電話＝〇四二三―八一―六八六三

会費納入について　年会費の納入については、総会時あるいは後日払込で納入願っていますが、未納の方について会則で三年間未納のときは自然退会とすることになっています。平成五年八月末現在で会員名簿の改訂版発行を予定しており、その時点で二年間会費未納の方については名簿から削除することになりますので、よろしくご協力を。納入については、以前お送りした郵便の払込票又は銀行振込（北海道拓殖銀行新宿支店普通預金1266 10東京旭川会宛）にお願いします。

井上靖記念館建設へ

ふるさと旭川が生んだ作家、井上靖さんの文化活動を讃えて「井上靖記念館」が、故人ゆかりの旭川市四区一條一丁目、旭川郷土博物館（旧旭川偕行社）の隣接地区に建設され、平成五年六月末か七月はじめにいよいよオープンする。郷土出身の作家、故井上さんは、国際的視野に立って日中、日露、日米関係を見据え、〝国民文学〟の輝く金字塔を樹立した。旭川は歴史が浅いせいもあり、文化人、芸術家らの輩出が他県ほどでないのは残念だが、井上さんを大先達に文建隆盛を願う声しきりである。

施工の旭川市がこの地に記念館開設に踏みきった、六つの理由をあげている。①井上さんは旧案の旭川第七師団軍医の長男として明治四十年、師団官金に生まれた。偕行社の隣接地区はこのゆかりの地である。②生前、井上さんはこの周辺の景観に強い関心を寄せられ、平成二年九月、旭川市の四條八丁目に建立された文学碑の除幕式に井上さんも招かれて参列、このおり、坂東市長との間に記念館建設話が出た。③環境が記念館のたたずまいにふさわしい。④旧第七師団ゆかりの博物館や北鎮神社跡がありゆかりの土地である。⑤同博物館には年間四万人の参観者があり、相乗効果が期待出来る。⑥博物館が将来、彫刻美術館として計画されており、芸術・文化ゾーンとして期待出来ること。

鉄筋コンクリート平家建て床面積四二四平方メートル、展示室のほかに研修室、事務室など、総工費二億二千七百三十万円。未亡人のふみさんをはじめ長男で一橋大教授、修一さんらの遺族の提供した遺品や著書などを陳列する。外観はしぶい日本調。展示のテーマは「人間井上靖とその世界」。井上さん関係の記念施設では静岡県長泉町の「井上文学館」についで旭川の記念館は二番目のもの。

ドリームランド

昔なつかしい旭橋は郷里旭川のシンボルとして美しい姿を四季おりおりに見せている。写真は石狩川の河川敷に生まれたオアシス、噴水のあるプールを中心に開基百年を祝い旭橋の川下、新橋との河川敷きに平成三年夏、オープンした名づけてドリームランド。

大阪新空路オープン

待望の旭川―大阪間の新航空路は日本エアシステム（JAS）によって平成三年四月二十五日、オープンした。坂東市長ら市代表各氏が大阪からの第一便で旭川に着いた。明治の開道以来、北海道と大阪は経済的にも縁が深い。

（写真は旭川空港着の坂東市長（中央））

郷土の先達文化人井上靖さん遺稿

王朝・旭川に思う

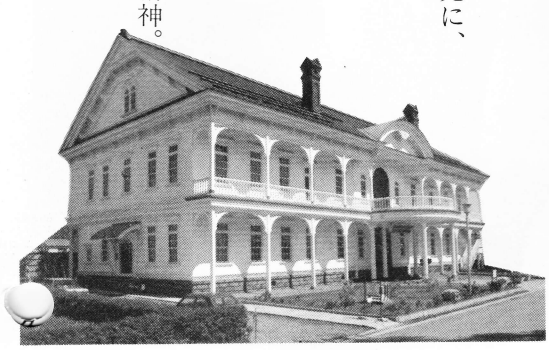
私は十七歳の、この町で生まれ、
いま、百歳の、この町を歩く。

すべては、大きく変ったが、
ただ一つ、変らぬものありとすれば、
それは、雪をかぶったナナカマドの、
あの赤い実の洋燈（ランプ）。

一歩、一歩、その汚れなき光に、
足許を照らされて行く。

現実と夢幻が、
このように、ぴったりと、
調和した例を知らない。

ああ、北の王都・旭川の、
常に天を望む、凜乎たる詩精神。
それを縁どる、
雪をかぶったナナカマドの、
あの赤い実の洋燈（ランプ）。


旭川郷土博物館

●新潟訪問小旅行記

柏崎刈羽原子力発電所を見学して

平成三年度の「郷土訪問の旅」は見送られた。同五年、旭川市の開基百年記念事業の一環として建築中のクリスタルホールが完成、東京旭川会から寄贈の三浦白琇画伯の絵画がこのホールに掲げられることになっており、落成式の当日、平成五年九月一日に合わせて実施しようということになり、かわってこの新潟小旅行が実施された。

平成四年七月十日、十一日の一泊二日。刈羽原子力発電所の親会社、東京電力のご配慮によるバス旅行が行われた。参加者は総勢四十一人。東京電力から管野課長、田部井係長のお二人が同行され、旭川市東京事務所の今井良三所長も参加された。

原子力発電所では広大な土地に七基の原子炉が立ち並ぶ。日本海の海水利用などを実際に目にすると、経済の成長、生活の向上に伴い増大する電気の使用量、それを供給する電源開発のエネルギー源となる原子力、とやかく言われていること、と思いがめぐり複雑な気持がした見学だった。

原子力発電所見学の前に、民

謡にある米山を見ながら昼食をとった。

夜の岩室温泉は弥彦山のふもとにあり、宿はホテル富士屋。宴会は親睦会委員長の本間敏弘氏の挨拶に始り、東京電力のお二方のご挨拶、参加会員長老格の松浦美喜雄氏による乾盃で、海の幸、山の幸に箸を運び、舌鼓みを打った。余興には庁立旭川高女同窓会の矢ヶ崎利恵さん、西田育子さんによるフラダンスを皮切りに、カラオケで歌の披露、ソロで、デュエットで、ひきもきらず。時が経つのを忘れて、歌い、盃を交わし、会話も弾み、楽しい親睦の輪がっていった。

翌十一日、バスで帰路についた。途中、弥彦神社に参詣、小千谷市「錦鯉の里」で動く宝石といわれる鯉を見たり、燕市で洋食器、寺泊の鮮魚市場で買い物をして、一路新宿へ。

懇親会でくつろぐ参加者

▽参加者＝今井良三、松島蔦、松浦美喜雄、武田陽子、須藤智恵子、西田育子、高橋文子、羽田陽子、西舘利子、畑中玲子、矢ヶ崎利江、橋本裕子、伊藤英子、小川礼子、石橋和子、磯部郁子、新国園枝、太田清美、新海矩子、向井地博明、向井地和子、市田勝一、市田誠子、川口了、川口はつみ、片山英二、片山文子、山際誠一、山際冨美子、本間敏弘、本間富美子、小須田富雄、杉本哲男、浜名武治、関晃、三浦勇、柴田静子、坂本珪子、圓城つる子、三浦久子、山田勝久、（順不同）計四十一氏。

次回郷土訪問旅行について

平成二年の旅行以後、種々の事情から実施を見送っていた郷土訪問の旅を、明年八月末から九月にかけて実施することになりました。平成五年九月一日に旭川市開基百周年記念事業の一環として建設中のクリスタルホールの落成式が挙行され、その時にかねてから会員の皆様のご協賛を頂き、市に寄贈した三浦白琇画伯の絵画が同ホールに掲げられることになっています。

忘れじのブルース

中村　猛

富士銀行の旭川支店長として二年八ヵ月の勤務を終り郷里旭川を離れたのは、昭和四十二年の六月でした。東京の本店をはじめ各地を転々としての単身赴任の生活が多かったし、子供達の成長に伴い教育のことなどもあって、昭和三十九年、東京の練馬に居を構えました。

一昨年、約十年振りに帰省し将来のことを考慮し不要の土地を処分し墓碑の改葬移転を行った際、或る長老から「郷里を忘れそして郷里を捨てたのか」と詰問的にいわれました。勿論、私は即座にこれを否定しました。もっともサラリーマンとして各地を転勤する都度、土地の人々の温情に接しましたので、その当時を追憶しては心のふるさととして懐しんでいます。まして私は旭川商業を卒業した後も、前後三回、九年三ヵ月にわたって旭川に勤務しており、私の心情を是非理解してもらいたい旨を述べました。

偶々平成三年四月、私が旭川在勤中の男女行員約五十人のうち元女子行員十一人が上京して、東京都並びに近郊在住の行員を含め四十余人と一緒になり「中村旭川会」として再会、交流を深めました。また私が五十五年前現役兵として近衛歩兵第一聯隊で過した時全国各地の出身者なので、それぞれが生れ故郷を自慢として語り合いました。が、郷土愛は憂国につながると思いました。

それにつけても旭川は転職率が高いことやテレビの視聴率が全国的に首位の域にある点など余暇時間が多い結果との指摘もあります。さらに『週刊東洋経済』によると全国の人口十万人以上の都市で、旭川市は衰退都市の一つに挙げられており、これはきわめて残念なことと思っています。

何分ともわが旭川は全国的にあまり知られていません。やはりまず活力ある都市として広く知らせることが第一でしょう。何しろ北海道の観光パンフレットを見ても旭川のことはほとんど出ていません。時々出ていてもユーカラ織りのこと位でチャームポイントがないみたいです。人口だけは全道で札幌につぐ第二位とのことですが、人口の多いことは今日ではそう自慢にならないのではないでしょうか。

いつぞや旭川市東京事務所を訪ねたおり、旭川出身の東京並びに近接在住の財界の有力者を以て旭川市の都市発展並びに市政向上への参考意見を求めるため、教人からなる懇談会的なものを設けてはと提案致したことがありますが、今こそ郷土の若い人達にその危機感を高め奮起されることを熱望して止みません。

事務局日誌

二・九・一～三・八・三一

▽10月12日＝第1回幹事会▽10月15日＝会計監査▽10月26日＝三浦画伯の一九八年日展作品「北海」150号、旭川市に寄贈決定▽11月6日＝実行委員会▽11月9日＝第14回総会・懇親会▽平成3年2月8日＝第2回幹事会▽4月20日＝北海道ふるさと会連合会総会出席▽5月16日＝広報委員会（会報編集会議）▽7月9日＝北海道ふるさと会幹事会出席▽7月30日＝第3回幹事会▽8月21日＝第1回実行委員会

平成2年度収支決算

二・九・一～三・八・三一

（収入の部）

繰入金	三七八、六九二円
年会費	七七〇、〇〇〇円
懇親会費	一、八一〇、〇〇〇円
名簿売上代金	一〇六、九〇〇円
寄附金	四五四、八九七円
雑収入	一九、一三〇円
合計	三、五三九、六一九円

（支出の部）

懇親会費	二、二〇二、九五三円
印刷費	五八一、七一四円
通信費	一八二、〇二七円
会議費	五一、六五八円
交際費	四三、〇〇〇円
事務費	二三、九七一円
手数料	一七、七八一円
支出計	三、一〇三、一〇四円
繰越金	四三六、五一五円
合計	三、五三九、六一九円

以上の会計事項について監査の結果、適正に処理されているものと認めます。

平成三年十月十五日

監事　黒崎　弘
　　植木宏昌

会員動静

▽新入会の方々

○川西　勲（勤務・ニチメン㈱広報部）
自宅＝〒二一六・川崎市宮前区宮崎一―一三―一六―一〇八
電話＝〇四四―八五四―〇六四一

○須藤昇一
自宅＝〒四一三―〇四・静岡県賀茂郡東伊豆町稲取カラ沢三〇一〇―七一・エンゼルリゾート伊豆稲取六三五
電話＝〇五五七―九五―五八一二

○竹村政芳（勤務・旭川市東京事務所）
自宅＝〒一三四・江戸川区北葛西四―一二―四　マイサンライズ五〇一
電話＝三八六九―六八六六

○田中啓子
自宅＝〒二七二―〇一・市川市相之川一―八―一二　ライオンズハウス
電話＝〇四七三―五九―〇八五九

○竹田伸明（勤務・ヤマト運輸大田支店）
自宅＝大田区東六郷一―一六―一七七辻ハウス一〇五
電話＝三七三三―一四九八

○服部恵祐
自宅＝〒一八四・小金井市前原町四―八―九

○古川美保子
自宅＝一六二・新宿区市谷左門町三三―三〇四
電話＝三二六七―二二三四

○福士君子（勤務・ルウ・ガルソン㈱企画チーム）
自宅＝〒一六七・杉並区西荻南三―三―一―二一六
電話＝三三三二―一八三〇

○増子正雄（勤務・増子事務所）
自宅＝〒三三〇・大宮市高鼻町二―三二〇―三四
電話＝〇四八―六四八―三八七一

○矢荻カツエ
自宅＝〒一二〇・足立区千住緑町二―四―五

○吉崎与一（勤務・三井リゾート㈱）
自宅＝〒一五三・目黒区東山三―二二―七―八〇八
電話＝三七一九―三二七五

▽退会された方々

赤松恵美子、阿部雅子、荒品澄子、石田ちせ、稲垣堪康、井上克巳、小栗隆治、太田明・ツタ子、太田征、岡本静子、小栗浩三、吉見冨子、菊地笑子、国沢正保、桜田善治、島田豊・和加、島津治郎、塩谷キン、須川チヨ、杉谷穣、須崎由紀子、水道啓、関根智恵子、高橋富美子、高久保行信、高瀬ミサ子、滝沢かほる、田村ツマヨ、中川千代、中島博子、西脇慧佑、二田弘子、沼宮内圭子、秦志郎・三枝子、早川祐子、林道子、古川勝吉、三浦英次、造酒多津男、宮田正美、八倉巻等、山口二郎、山本哲、吉田三郎

▽逝くなられた方

石倉康雄、薄誠次、工藤義男、小島猛夫、勝田正之、田村[redacted]ヨ、二川武

▽転居・訂正

○五十嵐章晴（転居）
〒三三六・浦和市大谷場一―一五―三三
電話＝〇四八―八八三―七八八五

○泉俊二（転居）
〒一八四・小平市前原町四―八―九
勤務・泉青果
電話＝〇四一三―八四―五五九六

○伊塚清（訂正）
〒一七三

○井上恵三（転居）
〒一六〇・新宿区荒木町二三　鈴商ビル二〇二

○井野栄子（訂正）
足立区南花畑四―一一―一四―二〇九
電話＝三八八五―四四四八

○奥原正枝（訂正）・川口了（訂正）
茅ヶ崎市

○加藤隆二（転居）
〒一八八・田無市西原町四―八―八
電話＝〇四二四―六四―六三八九

○佐々木浅男（訂正）
佐々木浅雄

○笹尾直哉（転居）
〒二七九・浦安市美浜五―六―一―〇一

○島田実（訂正）
〒二三五・横浜市磯子区杉田六―一九―一〇

○茂川トヨ（転居）
〒三三六・浦和市領家一―六―一七
電話＝〇四八―八八六―二三二三

○竹原茂雄（訂正）
〒二一六

○竹原博（転居）
〒三四五・南埼玉郡宮代町宮代台三―六―九
電話＝〇四八〇―三四―二一七九

○田中国夫（転居）
〒一八三・府中市本町二―二〇―一六　ポストハイム二〇一

○中本和子・国男（転居）
〒三四三・越ヶ谷市大間野町五―一九―七
電話＝〇四八九―八九―八〇七四

○西本武市（訂正）
川崎市多摩区菅二―一五―二八―一〇一

○針木康雄（訂正）
電話＝三四六一―九四三〇
勤務・針木事務所主幹

○福田小太郎（転居）
〒二二八・相模原市相模台七―三三―一二―五〇三
電話＝削除

○堀内敏子（訂正）
土浦市虫掛東三三三四

松井圭子（訂正）
港区高輪一―六―一〇　松井記念館
電話＝三四四〇―一二一一

▽三年十月三十一日現在会員数七四〇人。

編集後記

▽今号の発刊は大幅に遅れた。九月五日、最終会議を東京美装の会議室を借用して行った。とくに話題は出なかったが、旭川全体としての広報不足が何に起因するのか、話になった。旭川市東京事務所の持つ機能をもっともっと活用するよう計っていいのではあるまいか、との声が高かった。

▽[redacted]川から上京する〝賓客〟の応接[redacted]多忙だろうが、この大東京に全国的に通用する旭川出身の著名人が各界にいるはず。果してこうした人たちのリストを作成して、市そのものがどの程度フォローしているのか。広報は当方から打って出ないと効果は望めない。口先きだけのPRは口先きだけの宣伝に終ってしまうだろう。

▽旭川市生まれの作家・井上靖さんは平成三年一月二十九日東京享年八十三歳。〝百歳〟の旭川に寄せた「王都」の詩。改めて掲載させていただいた。亡き井上さんがおっしゃった通りわが故郷は「心の王都」であって欲しい。

▽そんな井上靖さんが旭川生まれであることを知っていた旭川っ子はどの位いたものか。旭川には生後一年間しかいなかったので、馴染みはうすく広報委員の中にも「知らなかった。生きていたら東京の総会で何か一言おっしゃって欲しかった」というものも。ともあれ、井上さん、いい詩文を遺して下さった。心からのご冥福を。

▽というわけで何とか形をととのえたのが本誌です。総会の写真はいつもお世話になっている毎日新聞社の中西浩編集委員にお願いしました。厚く御礼を。会員各位で本会報へのご注文があればお寄せ下さい。「トウキョウの中のあさひがわ」休みます。タネ切れです。会員の皆さまのご推薦を――。(K)

＊

▽本誌の編集スタッフ＝桑本平八、田村昌士、大久保藤次郎、須藤智恵子、伊藤一男、橋本裕子、高橋文子。(順不同)

[redacted]